

第3回福岡女子大学の抜本改革に向けた準備委員会議事録要旨

1 日時 平成20年8月18日(月) 13:30~16:30

2 場所 ホテルレガロ福岡 カトレア

3 出席者

海老井委員、天野委員、高木委員、河部委員、坂本委員、岡崎委員
織田委員、富山委員、中津井委員、松田委員、吉田委員

4 会議の内容(次第参照)

(委員長)

それでは第3回準備委員会を始めさせていただきます。

<準備委員会に初めて出席される委員の自己紹介>

(委員長)

審議に入る前に、福岡女子大学の方から前回報告された改革案について、補足説明をしたいということなので、高木学長の方から説明をお願いします。

(高木学長)

今回、学内の改革部会と私、学長の方で補充を行ったもの。

「Ⅰ 改革における人材育成の目的」、「Ⅱ 教育課程、組織」については、前回と基本的に同じ、主なところを申し上げます、「1 学部、専門コースの設定」、これは基本的に1学部で、コースは8つ。これを入学試験の性格から言えば、基本的に主に文系、主に理系に分けている。

それから「2 学生が主体的に学ぶ専門コースの教育課程」、「3 多元的な文理統合教育」、「4 外国語教育」、「5 総合コミュニケーション教育」、「6 資格教育」、「7 海外留学」についてその内容を説明している。

それから「専門コース履修概念図」は新しく付け加えたもので、履修の過程で個々の学生がどう専門コースに絞っていくかという概念を示したもの。履修例として、主専攻はあるコースのことを主に勉強して、卒業研究が最後の段階になる。副専攻は、その前の専門科目までを履修するとするか、あるいは専門基礎科目のところで留まるのか、この辺りはいくつかの選択があろうかと思う。とにかく、このような主専攻、副専攻という概念を取り入れている。

次は「大学改革「専門コース」案」について。これは「専門コース案」とあるが、それぞれの専門コースについて、どのような内容を具体的に考えているのか、我々が持っている現有の人的資源を主に説明している。コースは8つ。

- (1) 「日本文化コース」
- (2) 「アジア文化コース」
- (3) 「英語圏文化コース」
- (4) 「国際社会コース」
- (5) 「環境システムコース」
- (6) 「生活デザインコース」
- (7) 「生命科学コース」
- (8) 「栄養科学コース」

どのような科目があるかと言うと、「導入科目」と「専門基礎科目」「専門科目」「卒業研究の例」「卒業後の進路、資格」という風に示している。

「導入科目」と言うのは、高等学校から大学に入る、そういう導入であると同時に、専門分野の科目のある基本的なところまで導入する。そして更に、先端の姿を少し紹介する。そういうふうに、非常にこれ、私どもとしては目玉として考えている科目。

(委員長)

ただ今ご報告いただいた内容も踏まえてご審議いただきたい。

それでは事務局から資料について説明をお願いします。

(事務局)

この資料は、これまで準備委員会でいただいたご意見、あるいは改革検討委員会からの提言を踏まえて、本日も議論いただくたたき台として考えている。

内容は、大きく10項目で構成している。

- 「第1 改革の基本理念」
- 「第2 学部学科の再編」
- 「第3 新たな教育システムの構築」
- 「第4 魅力ある留学制度の構築」
- 「第5 学生寮を教育の場として活用」
- 「第6 入学者選抜の多様化」
- 「第7 社会貢献機能の充実」
- 「第8 教職員の確保」
- 「第9 改革の実施時期等」
- 「第10 新たな施設の整備」

(委員長)

それでは、第1の「改革の基本理念」というところだが、ここについては、後で全体を通してご意見をお伺いすることにしたい。

まず、第2の「学部学科の再編」について、1学部にした場合、あるいはそうでないということにした場合についてご意見をいただきたい。

(委員)

1学部の時の学生のコース変更と、2学部といった時のコース変更のタイミングに違いは出るか。

(委員)

基本的には出てこない。

(委員)

1学部とした場合には、学部を通しての教育の柱と言うか、その教育のコアをもう少し明確にする必要があると思う。「環境」だったり、「国際」だったり、かなりバラエティに富んでいるので、この学部として一貫して何を中心に何をコアとしてやるのか、例えば、教養を重視するというのであれば、それはどういったところにそれが出てくるのかを明らかにすることが必要。

(委員)

そう、一本の筋をどのように通すのか。旧来の今ある2学部を引き寄せて、冠だけがちょっと一つになっているようなことではいけない。例えば「国際教養」というコンセプトを使うとすると、伝統的に一番はっきりステータスがあるのがICU、それから最近の早稲田の国際教養学部とか、秋田の国際教養、そんなところが多分頭に浮かぶだろうと思う。その時に、そこはこういう筋を通してているが、あなたの方はその辺はどうですかということが問われる。

(委員)

コース毎に選抜をし、導入科目から全てカリキュラムが決まっているというような印象を受ける。あたかもコースが学科みたいな感じで、統一された1学部1学科の全体像が見えにくい。ある程度決められたところに学生が入ってくるとなると自由に自分の学びを作り上げていくというような理念とは少し離れているかなという印象がある。

(委員)

確かにコース毎の導入科目があるが、いくつかの導入科目を必ず取る、そして更にまた専門基礎の方も取る、そのように個々の学生が履修科目を選択していく過程でコースが絞られまた決まっていくということ。

(委員)

となると、導入科目とか外国語教育、英語教育などは横断的なもので、学生が入って来た時に、自分の興味に従ってどれを取ってもいいというようなイメージか。

(委員)

そのような要素も入っているのが導入教育。

(委員)

となると英語教育も同じような考え方か。横断的、全員が同じカリキュラムで取る。

(委員)

そう、英語についてはグローバル化に対応ということで、学生全て共通。ただし、到達レベルで少し途中で差が出るかも知れないが。

(委員)

導入教育というのも、色々な解釈があって、拝見するといわゆるクリティカルシンキングみたいな、問題解決能力であったり、分析したりするということだが、それを英語教育の中で、もっと横断的にしてもいいのではないか。

(委員)

共通しているのは、一つは外国語によるコミュニケーション能力の育成、それから教養教育を重視する、これは今の1学部の案の中では、これを全学生共通してやっけて行くということ。英語教育もこれまでの意見の中では単に技術的なことを勉強するのではなくて、英語教育の中で、色んな判断力など、そういった力が身に付くような手法をやはり取り入れるべきではないかということで、そういう風なプログラムを組んでいくことになると思う。ただ、英語教育がこの学部の核ですよというには、ちょっとどうかなと、それは、英語は道具として、あるいは基礎的な教養を身に付ける、そういうものとしては、あるのだろうけど、その学部の中核をなすものというところまではいかないのかなと思う。

(委員)

4年間をまとめて一つの教養教育と言うか、そういう形で捉えようという出発点だったので、あまりコースとか学科とかを明確に打ち出さない方が良いのではないかといいことだったが、それでも入試を受ける生徒のことを考えると、ある程度専門性が見えないといけないということでコースということが出てきたと思う。

(委員)

ICUは1学部で「教養学部」、その時に1学部で教養学部を通す時に、今までの環境、生活系の分野、これ理系として扱ってきていると思うが、これを文学部の再編された国際文化なり国際教養と上手くドッキング出来るのか、その筋は何なのか、多分早稲田の国際教養学部でもICUでもどちらかと言うと文系のところを基本に置いて筋として成り立っているのではないかと思うが、それはどうか。

(委員)

改革のところで非常にそこに大きな議論があった。ICUは元々「理学科」というのがあり、工学以外の理系のものは全て揃っている。それなくしてリベラルアーツはあり得ない、基本的な理念としてはリベラルアーツであるからには理系は外せないということ。

(委員)

簡単に言えば、1学部で持ってくるのであれば理系的要素のところはちゃんと含み込まれた国際教養学部で成り立っているのかどうか、そこではないか。

今ある理系サイドのところは引張られすぎたイメージになると、どうしても2学部の方が良いのではないかと。少なくともICUは理系を含んで1学部1学科で行っている。

(委員)

自由度がある、学生が自ら色々な所から選んで、4年間の学びを形成していくのだというところを上手く見せていくことが大切。あたかも学科が複数あるような感じに捉えられてしまうと少し問題。

リベラルアーツとか、教養とか言うのであれば、そしてそれを4年間かけてやっていくのであれば、やはり自らが、お膳立ての上ではなくて、色々な所から自分でコース群みたいなものを作り上げてやっていくというのが理想というか、それが本来のリベラルアーツの学び。だからこそ最初のうちに、自分でリベラルアーツの大学で学べるような、自ら考えて学び取るようなスキルを導入教育のところで教えていくということがすごく重要なこと。

(委員)

最初からコースが立っているように見られたのかも知れないが、あくまでも、選択して最終的にあるコースに固まる訳であって、1年、2年は基本的に白紙というのがこの前提。

(委員)

前回の議論の中に、国際的な課題を解決する、その何かに関わる視点だとか、能力を持った学生を育てていこうとした時に、今、重要な国際的な課題は何かと言うと、一つは多様性への対応力、もう一つは持続性の対応力があるということが必要だということで、それを具体的な、いわゆる応用だったり、ディシプリンにすると、前半はコミュニケーションだとか、ビジネスだとかいう分野での学びを選んでいこうし、持続性という視点で考えると、食だとか、環境だとかで活躍の場を見出すという可能性はあるだろうと。

少なくとも入り口の所で、いかに自分の国の環境とか、自分の国の食ではなくて、やはり国際的な視点で、しかもアジアにすごく近いという意味での国際性や地域性を考えた視点を持たせるというのが、全てのコースに共通している。そこで、自分がどこに活躍の場なり、学びたいものを見出していくかというところの出口として、いくつかこういうコースが設定されるという風に理解をしている。なので、どのコースにおいても一番最初のところで、ずっと議論されているが、国際的な教養と言った時に、やはりそういう視点を持てる、歴史を本当に理解をしたり、あるいは文化の多様性を理解した上で、環境問題や食の力が付く人というような入り口のところを、「国際的な視点に立って」という、ある意味で使い古された言葉だけでなく丁寧に説明することが必要。

(委員)

やはり、環境とか、食、健康とかいう分野を、本当に国際教養の中身として、どこまで作り上げられるかというところが、何か勝負の感じがする。

(委員)

受験者の立場から見ると、どうか。

(委員)

今の案では、既存の志願者よりも、新しい大学の理念に基づいて、その理念に沿った入学者をより多く求めていくことになると思う。しかし、新しい大学の仕組みとか、入試とか、理念とかを理解するには若干時間がかかるので、そういったところのタ

イムラグはやはりあるとは思う。そこを本当に待てるかどうかといったところがポイントかなという気はする。特に九州の地方の高校の進路指導とか、キャリア関係の進路学習に関しては、非常に具体的にと言うか、自分の将来を描かせる、直結する高大接続ということを高校1年生の頃から求めてくるので、そのようなことを考えると、最初の内は一番の選択肢になりにくいのかなと思う。

(委員長)

その他、学部学科の再編のところで、全体的に色んなご意見をいただきたい。

(委員)

学内で議論されている改革案、文化系と環境生活系の二つのグループのコースがあるが、やはりミックスしてないと思う。これを相当大胆にミックスして、例えばアジア文化コースというのがあるとすれば、そこに例えば環境や食、健康みたいなものがどう絡むのか、逆のことも含めて。そこがミックスして、それが現代の国際教養だということを示すことが必要。学内の意識を変えるという点では、相当ミックスしたコース建てとか何か考えないと、やはり依然として2学部が残っていると、形は出来てもということになるのでは。

(委員)

以前のこの委員会の場で、4年で卒業する時にそれなりに大学院に合格出来るだけのレベルに達しておく必要があるという議論があった。そういう点で、かなり今の議論が問題になるところだと思う。アジアの文化というところで、環境ということであれば、それは文化の中としての、社会環境として扱えるかも知れない。しかし、環境を改善するための技術、物質をどう扱うとか、そういった理工的な専門のところについて、ミックスして、本当に大学院に進学できるのかということになろうかと思う。ミックスの仕方が難しい。

(委員)

全ての学生が大学院へ行くっていう訳でもないので、何かやはり、そのところはもう少し踏み込まないと。学内の意識を変えるという点が基本。

(委員)

大学内では、2学部を希望する意見は率直に言って強い。

(委員)

その意識構造を変えないと、新しい大学に再生することはできないのではないか。

(委員)

今の点について、ICU では、ミックスすると大学院に進むだけの学力が付かないのではないかという懸念については、どういう議論が行われたのか。

(委員)

これは改革以前のリベラルアーツの考え方で誤解があるところだが、リベラルアーツの大学に行ってしまうと、専門性が身に付かないで、広く浅い知識だけじゃないかって、それはよくある誤解だと思う。専門も勿論やるわけで、ただリベラルアーツで重視しているのは、それだけをやるということではなくて、「幅広い視野と柔軟な思考力、総合的な判断力や創造力、問題発見・解決力」、どのコンテンツを取り上げても、汎用性のあるスキル身に付けましょと、そうしたらどの分野に行っても法学行こうと、医学部に行こうと、音楽へ進もうと、宇宙飛行士になろうと、どの分野に行っても、そこで自分の立ち位置を決めて、積極的に関わって行くことが出来るというそういうこと。勿論 ICU は他大学に比べて、大学院に行く進学率が高いというふうに理解している。だから、特に大学院に行くまでにしっかりと、そういったスキルも身に付いているので、専門的などところに即入れるというものが身に付いているので、現実的にいろいろ他の大学院でも活躍している学生がいる。

(委員)

「国際教養学部」という、仮に1学部にした場合、福岡女子大の場合は、ICU とやはり違う。ICU がアメリカにあるような、本当にリベラルアーツ型の大学ということになると、例えば秋田の国際教養は少しビジネス系によった国際教養学部というイメージで、早稲田の国際教養学部は恐らく文化というものによったような国際教養学部。そうした時に、福岡女子大の国際教養学部の特色は何と言った時に、環境とか、食というものに少し色がかかった国際教養学部。言ってみれば、国際教養学部の中の一つの特徴として、この三大学なり、国際教養学部で一学科しかやっていないところの大学の比較をした時にどう説明できるかと言ったら、資源としての今持っているものの強みで言えば、食と環境というものがある。そこに特色があるという風考えた方が良い。ただ、そうなった場合に、今のこの3つのところの前段階として、何か共通するものを、国際教養学部全体に持ってきて、その特色として、福岡女子大の場合は、こういう風な、そこに文化と環境と食という関係があるという風に見方を変えた方がよい。そうすると、例えばスキル系の一番最初に全部やらなければいけないものというのも勿論そうだが、もう少し例えば専門でも、食というものとアジアというものについて、体験学習というものをもし全面に出すのであれば、そういうプロジェクトを3年でも、2年でもいい、10ぐらい出す。その10のところは環境とアジアと

というのがあったり、あるいは食と環境というものがあったり、あるいはアジアと食があったりという風に、つまりこの3つのコースのマトリックス的なものが、それが体験として、例えば3週間コースやそういうのに必ず全部が行くと、その時は、海外の何々栄養大学か分からないが、そういうとこと一緒に何か協力して、やることも出来る。そこでやる調査・研究というのは変わっても、段々増やし、それであるところまでいったら、ちょっと切り替えて別にするとか。そういう目玉を作るとかすると、先生方が自分ところのこれまでのテリトリーのところの前段階に「何となくみんな一緒にやりましょう」みたいなところを作るのではなくて、もう少し、シャッフルした感じで、国際教養の中の特色としての自分の学科は何かという風に考えてくるようなカリキュラムの出し方というのをもう少し工夫されるといい。

(委員)

そういう類似の他大学のケースと対比して、今、持っているこちらの大学の特性を活かしたら、どういう国際教養学部が出来るのかという、そこをもうちょっと詰める必要があるのではないか。その時に環境とか、生活とか、食とかいうのは、他にない資源。

(委員)

特色になるところは、理系の素養とか、諸科学の基礎というところではないか。それを語学や何かと並べて示すとはっきり見えなくなる。前に大学を見せてもらった時の印象では、理系の実験室や何かがあったが、ああいう所を全ての学生が経験するように、そういうものを他の大学よりもたくさん経験するチャンスがあるというのは非常に大事だと思っているので、理系を強化するという考えに賛成する。現在、日本の男女共同参画局などでも女子が理系に進むように推進しようということに力を入れている。今、小学生、中学生をターゲットにしている訳だから、彼女たちが大学生になる頃に、ちょうどこちらの大学に入れれば、つながるのではないかと思う。

(委員)

既存の枠組みとかで議論をすると、多分、最初に環境とか、食とか、何か文学があって、その上に「国際」というお化粧をしているということになる。そうではなくて、「国際」がベース、ファンデーションで、その上に食とか環境でメリハリつける、メイクをする、それぐらいひっくり返るのかなという風に思う。

(委員)

そういう発想だと思う。

(委員)

進学生とか、受験生をどう確保するかということが、どうしても教育現場から出てくる。学科あるいはコースとか基本となるまとまりが、受験生を引き付ける特色をどのように表現すれば受験生を確保する上で有効なのか、良いのか、どう工夫するのか。

(委員)

恐らくその説明は最初の基本がきちんと出来ていれば、後はどうにでも言いようがあるので、あまり今からどういう言葉を使ったらということにこだわることはないと思う。とはいえ、1学部で、リベラルアーツを全面に出すと、日本の高校生は、専門学校的なところに反応しやすい子供が多いので、分かりにくくなることは確かではある。そのところは、言葉を重視するのではなく、骨子を固めてしまって、それをいかに後から説明するかの方を考えたら大丈夫だと思う。

(委員)

2学部化した時に、一方の環境とか、生活何とかというところに本当に受験生が集まるのか。これからの見込みとしては、そちらの学部の方が厳しい傾向にあるかも知れない。

(委員)

女子大の受験生、県内の高校生が多い。そう考えると、新しい大学の周知は、極端に言えば、県内の高校生に、あるいは中学生に十分に理解していただく、これを徹底的にやる。それから、あと県外から優秀な学生を呼び込む。これは当初からは少し厳しいのかも知れないが、卒業生が出て、力を示していくということで、県外からも優秀な学生を集めるということだと思う。だから、あまり今の段階で学生確保のことを心配して、議論するよりも、もっと先のことで議論をしたらどうか。

(委員)

受験生問題は、今までできているステータスと、それから国際性もイメージで打ち出せば、大丈夫だと思う。むしろ、環境とかいう方が危うさを持つ。

(委員)

関東・関西と福岡では基礎人口が全然違う。いまは、いい意味で保守的な層を代表している志願者がある。そういう現実を立て、今のイメージ、将来のイメージが上手くマッチするかということがある。

(委員)

1学部にしても2学部にしても色々考えると難しい問題があるが、しかし、いずれにせよ打ち破っていかないと改革にならないのではないかと。

(委員)

専門性との兼ね合いで、理系だけをやってきた学生と、福岡女子大学が目指す新しい文理統合型の教育を受けた学生で、例えば出口として、大学院入学を考えた時に、差が出るのではないかと。多分それは4年間で費やせる単位時間が一定で、理系だけで詰め込んで4年間終わる学生と、理系もやらなくてはいけない、文系もやらなくてはいけないという学生だと、理系に費やせる実質的な時間数がある程度制限されるだろうと。そうすると、大学院で理系の知識で判定を受けるときに、不利になるのではないかと、ある意味で中途半端になるのではということに気がされているのだろうと思う。

それは、果たして発想の転換というか、文理統合というのが、文系プラス理系という足し算的なところで成り立つのか、それともそうじゃない形での成り立たせ方があるのではないかと、ということだと思う。多分、既存の文系型の教育と九大の理系型の教育をただ公武合体すれば、明治維新としての文理統合教育が起きるという事では多分ないだろうし、それで、ICUでやられていることも多分そうだと思うが、発想の転換、例えば何か世界や現象を見ていく時に、これまでの文系的な思考だけで見ていて足りるのか、あるいは理系的な知識だけで出来るのか、いやそうではないだろうという、その複眼的な要素が今必要だということで、文理統合というのが求められているのではないかと。多分、教員の側としても、恐らく自分が今まで培ってきた専門性が、どういう立場から培ってきたのかというところから反省が迫られるような話になると思う。

それで、英文学の先生で、シェイクスピアなんかを十年一日のごとくやってきている先生がいるようでは駄目だという意見があったが、シェイクスピアをやる時に、どうやってやるのかという、そこだと思う。どういう形で今の学生にシェイクスピアを提示して、そこで何を学ばせるのかという話であって、今の世界に関係の無いシェイクスピアの、中世英語を持ってきて、それを教室で読んで、日本語に翻訳して、はいおしまい。それでは駄目だけれども、どうやってシェイクスピアを現代に生かすのか、そこが発想の転換。それと同じような発想の転換が全体に求められていて、それが多分、文理統合型の基本教育科目の中に何かうまく理念として示せると、そこから、さらに特定の分野、特定の思考を深めていきたいというところで、専門性が出てくるといふ形が出来ると、とても理解をしてもらいやすくなるのではないかと。

(委員)

杓子定規に文と理を足すということにはならない。やはり例えばコースとか、そういうレベルまで落としていったら、ある所は理系にかなりシフトしているかも知れないし、ある所は文系にシフトしたコースが出来るかもしれない。だから、全てが文と理を足したようなもの、それはちょっと現実的ではない。

(委員)

言語教育が強調される時に、英語教育ばかりをやっても、母語である日本語の基礎が出来ていなければ、その学生の英語力が伸びるはずがない。日本語でろくな語彙を持っていない学生が、例えば英語で語彙数を増やすようなことは考えられないし、日本語で議論が出来ない学生が英語になった途端に議論が出来る、そういうのはあり得ない話だ。語学教育を充実させようという時には、当然母語である日本語教育の充実とともに、外国語の教育、英語教育をやっていかなければ、相まって伸びていかない。スキルのところでも同じだと思うが、例えば自己表現能力、プレゼンテーションとか、ディスカッションとか、そういう自己表現能力を伸ばしていこうと思えば、例えば情報処理なんかも含めて、情報を収集する能力というのがなければ、自己表現出来ない。持ち玉がなくて、どうやって一体撃つのかと、その実弾を込める部分での様々な処理能力というのも持っていなければ、自己表現も出来ない訳で、入れる方と出していくところ、両方必要になってくる。それと同じ考え方で日本を理解したり、世界を理解したりする時に、文系的な視点だけでの理解では足りないし、理系的な知識なり、思考法というのにも必要になってくる。そういう風に二本立てで、うちは教育をやっていくというようなところが、こう何か一つの特色として出せ、カリキュラムに反映できるのではないか。

(委員)

文理統合という時は、これは文と理を合わせるということではなくて、本当に、どういったことを基にして、どういう風に統合させていくのかという、そのカリキュラムの打ち出し方、これ非常に難しいだろうと思う。ある意味ではこれが今回の大学づくりの目玉、一番根幹になるところでないか。

(委員)

例えば、資料にあがっている5つの大学の国際教養学部というものをきちんと分析して、今度の改革がどういうスタンスで置きうるのか。そういう作業を一度やってみることも必要かと思う。

(委員長)

それでは、事務局の方で作業をお願いします。

<休 憩>

(委員長)

それでは再開させていただく。

第3の「新たな教育システムの構築」。

(委員)

今までの議論からしても、共通教育の中に、1つ柱を立てるなりしてもう少し理系の考え方なり、素養を入れてはいかががかと思う。

(委員)

例えば、共通教育、基礎教育のところで、理系の先生と文系の先生がペアになって教えるような科目を並べるというようなことはどうか。

(委員)

共通教育なり専門教育にしても、核となるような考え方がこの中に見えてくるようでないといけないうらうと思う。バラバラではなくてここはちゃんと一貫して共通のものをやるんだというのが、少しこの中に見えるようにしないといけないうらうと思う。

(委員)

それと、フィールドワークと言うか、外へ出て色々経験をする教育というのをちょっとイメージした方がいいのではないかと思う。共通教育のところで、地域の色々な企業や機関へのインターンシップだとか、海外に行くこともあり得ると思うが、何かフィールドの経験を積ませるとするのは非常に大切。早稲田は1年間の留学を義務づけ、それから秋田の国際教養も1年、ICUではどうか。

(委員)

ICUはきちんとした単位になるという形のサービス・ラーニング。ボランティアではなく、色々なNGOだとか、あるいは南京大学に行って英語を教えるとか、あるいは日本語を教えるとか。サービス・ラーニングは今、文科省もかなり強調している。

(委員)

それは絶対入れといた方が良い。

(委員)

その時に特色とするものが、例えば「アジア」「国際性」「食」と「環境」とするのであれば、体験的な学習には、全部とは言わないが必ずその要素を入れる。例えば地場産業での体験学習には、漠然と地場産業に行き、見てくるというのではなくて、国際戦略、特にアジア戦略と国内の問題をその企業がどうやっているかとか、そのために英語のビジネスレターはどう書いているのかというように、国際化とアジアに関する明確なテーマを決めて学生を3週間出すというようにする。その場合、九州とアジアの関係、あるいは九州の地場産業はどういう状況にあるかということをして事前の授業に入れておく。そういう特色となるキーワードの科目を全部とは言わないが、必ず取らなくてはならない単位の6割程度入り混ぜて授業すれば、特色が形になる。何かそういう教え方や科目の工夫を目に見える形でここに入れておくことが必要だと思う。言語教育とか異文化理解教育と言うのではなくて、具体例が幾つか入ってくると、もう少し高校生もイメージができるのではないかと思う。さらに、教育方法としては、「体験」と「福岡」と「地域性」というものを重視すると謳っているわけだから、それも入れ込む、とにかく、イメージできる作りにはしておくことが必要と思う。

(委員)

実際にそういうようなことをされている大学というのはあるのか。そういうカリキュラムを持っているとか。

(委員)

全学的にやっているというよりは、学科とか個人の先生がやっているところの方が多い。そういう具体例はGP関係にある。

(委員)

カリキュラムを通して国際性も地域性も色んなことを統合して勉強できるというようなものを示せたらすごくいい。

(委員)

アジアの国際交流みたいなコンセプトをもう少し打ち出した方がいい。アジアというものを意識して「アジアとの」、という風に言っても良いし。

(委員)

前日も「アジア太平洋子ども会議」のことを言ったが、あの資源はすごく豊かで、一度にアジア太平洋の40ヶ国、地域の色々な教育だとか環境だとかを生素材で学べるという機会がある。例えば、1年生で40ヶ国から来る子供たちと過ごす体験をして、2年生は引率の先生達から40ヶ国の色々な、例えば文化なり食環境を学び、3年生は自分が向こうに行って、送り出すときに付いて行き、というような形でずっと繋がる。一つの例として実際の参加型にもなるのではないか。

(委員)

GPの審査をしていて思ったことがある。GPで出てくるプログラムやプロジェクトは、当初から戦略的に考えられているものは少なく、一教員の個人的努力であった試みを大学が援助して広がっていくものが多い。ただ、広がっていく時にそれを学内としてどう位置づけていくかということが非常に重要である。普通、広がる過程で、大学の建学の精神とか教育的な方針への意味づけがなされるが、大体は後付的に作文的に説明されていく。けれども、実はそこが非常に重要な点で、後付で説明されることによって、「あっ、このプロジェクトはそういうような意味づけもあったのか」、「うちの大学はなるほどそのことのためにやっているのか」と意識され、そこから広がりが出てくる。つまり、萌芽的な小さな試みであっても、活発化している試みには何か成長してきた意味がある。その意味づけの仕方、強調する方向がその大学の特色と合ったものということが重要で、そのことによって、更にその部分が強化され、その大学の教育の特色が意識化される。そのような経緯をとるものがGPでも多い。

(委員)

先ほど委員が言われたことは、共通教育、一般教育という括りで説明出来ない、新しい概念だと思う。何かそこにこそこれからの新しい大学の特色があるような気がする。例えば、既に使われている言葉なので言い方を変える必要があるが、コア教育とか、九大ではコアゼミという言い方をしているが、それに近いようなもので、共通教育なんだけれども今までの概念の共通教育じゃないもの、本当にこの大学のコアになるというようなカテゴリーを一つ括って打ち出すというのも一つかなと思う。

(委員)

受験生に分かりやすいと言うか、あるいは保護者を含めて、あるいは高等学校に、そういった点からは何か良い言葉は。

(委員)

タイトルを気にするよりも、その実際の中身や授業の具体例を見ることからイメー

ジング出来るということが重要である。

(委員)

ICUは、メジャー、サブメジャーという仕組みをとっているのか。

(委員)

改革後は、メジャー制になった。メジャー、ダブルメジャーも出来るし、メジャーマイナーも出来る。

(委員)

1年生からの進み具合はどんな風になるのか。

(委員)

メジャー別に選抜方法をとっているのではなく、一括して取る。だから理系文系の区別もない。2年生の3学期目までにメジャーを宣言するという必要があるので、そこまでどの様にして導いていくかということも、現実問題として非常に難しい。偏ったメジャーに、6人の先生のところに100人来てもらっては困るので、蓋を開けてみなければ分からないが、それは入る前の段階からオープンキャンパスその他を通じて、それぞれのメジャーの先生たちが自分たちのメジャーの魅力はこうであるとかアピールする。それで、それぞれの先生方が必死に宣伝に努め学生をなるべく沢山集めるようにという命題掲げて皆一生懸命やっている。あくまでも主体は学生の方に有るわけで、これとこれをやってみよう、或いは1つやってみよう、色々な学際的なものをやってみようということは、あくまで学生が決める。ただ、そう言うものの高校生だと、急に発想の転換が出来ないので、「アカデミックプランニング・センター」というものを新たに作って、何時行っても相談に乗ってもらえとか、そういう手厚い手当をしないと中々理想に近づくのは難しい。

(委員)

全体のコアになるものというのは、大体1年生のところに集中するのか。要するに共通にとる何か中心科目みたいな。

(委員)

それがやはり ELP、英語教育プログラムに相当するかと思う。英語で、多元的な見方とか、思考力だとか判断力だとか、問題解決能力とか図書館の使い方とか、非常に細かなスキルからどうやって学問するかということまで、それを共通して担っている。それが1年生のうちに集中しているので、ある程度皆が共通した概念で教育が受

けられる。

(委員)

それは英語でやられているのか。

(委員)

英語でやっているが、プレゼンテーションスキルとかそういったことで非常に威力を発揮している。

(委員)

そのところは大切。吸収させていただく点かも知れない。

(委員)

それと、例えば問題解決能力とか幅広い視野とか、思考能力とか、口で言うのは簡単だが、そんな一朝一夕に簡単にリーダーシップとか問題解決能力が身につくものではない。本当に辛い毎日毎日の日々の格闘、現実的な問題と遭遇して自分のものになっていくのだと思う。ICU の場合、1年生は殆どそれに費やすと言っても過言ではない。それだけの時間を使う価値が十分にある。もちろん基礎科目的なところはあるわけだが、それ以外は全て英語教育プログラムという形。それから、どこでそれを担うか、多分コアになるようなところを、誰がどのようにやっていくかということが凄く現実的なところで重要。ある程度長い目で見ていって、ここを卒業したらこういうような人材が育つというようなものが見えてくるのには少し時間がかかると思う。なぜならば一朝一夕に、簡単に見える能力ではないので、そういった長い目で見るということも必要だし、卒業生がそれを身につけて世に出て行くということが出来ないと、ただ言葉だけに終わってしまう。

(委員)

1年生のところで徹底してそういうことをやるというやり方は参考になる。

(委員)

ICU の学生は、自分の人生、生涯のキャリア設計についてどのような歩み方をしていくのか。

(委員)

4年をかけて、やはり学生自身が考えていく。別に何か、コースがあるとかいうことではない。自分自身が自分の人生をどういう風に生きていくのかを考える、その考

えるスキルとかそういうものは教えるけれども、後は自分次第ということなので、何か特別にそういったものが、カリキュラムの中であるとかということではない。だから、サービス・ラーニングだとかフィールドワークだとかインターンシップに行ったりとか、そういったことで、学生それぞれが自分で考えてつかみ取っていくという形だと思う。だから、お仕着せでやるということがまずないというのが我々の理想としているところ。あと、一般教育科目に関して ICU の特徴だと思うのは、専門の先生方が一般教育科目も必ず持つという形。自分の専門から見た、それぞれの分野で一般教育を教えるということに凄く意味がある。一般教育を専門に教えるということではなく、最先端の専門の先生方が一般教育を教えるということに凄く価値を見いだしている。

(委員)

多分そういうことだと思う。そうした時に、キャリア教育を重視しますといった言葉が、じゃあ何と聞かれると上手く説明できないだろうし、もう少し、そこは教育のあり方そのもののところできちんといわゆる選択する力であるとか、判断する力というところがそのキャリアの設計に繋がっていくというところをしっかりと繋げておかないと、書いてあるだけでは浮いてしまうような気がする。

(委員)

総合化されたプログラムとかそういうものの一番の心配はそこ。学生にとっては色々勉強を取れるチャンスがあっただけで最後の4年終わる時に、「私は一体何をやったのか」というように学生が自信を持ってくれるか分からない心配がある。そういう意味でコアの部分が形成されてないと非常に不安であり、それが一番問題じゃないかなと思う。やっぱり個々の学生が4年間終わる時に、自分がこのことについてある程度の専門知識を持って出て行くんだという自信をどこで付けさせるか、それが総合系の学部では結構苦労しているところ。

(委員)

私たちがよく議論するが、結局何かつまみ食いでも終わってしまって、何か1つのコアみたいなものが見えてこないのではないかと、それは私たちが懸念すること。だから、「アカデミックプランニング・センター」みたいなものを作っておいて、或いは、一般教育のところでも専門の方が絵を見せてあげるとか、モデルカリキュラムみたいなものを見せたりとかして工夫している。ただそれには縛られないということは何時もあるが、そういう心配は確かにあると思う。

(委員)

これは今の日本の大学が直面しているジレンマみたいなのところがあると思う。経済や法学部に行ったら割に分かりやすく、ディシプリンが決まって、テキストが決まっているみたいなのところがある。だけど、それだけではもう世の中に出て、ちょっとミスマッチという状況もあるので、大学も総合的な能力をということで色んな総合性のある学部や学科を作ってきたが、逆に送り出す方からすると、4年間終わってちょっと不安が残るという、或いは学生自身も自信を持ってないという、ここの自信をどうして付けさせるかが問題。

(委員)

専門的なものを見せれば見えやすいし、特に日本の高校までの教育を受けた子に至っては安心なわけで、もう見えてるから。だけど、リベラルアーツはそうではないと、敢えてそういったものはしないと、そして自分の中で作って行きなさいということ。だからそこはとっても難しいところでジレンマでもある。

(委員)

だけどそれをやらないと、出たらミスマッチが起こって、というのが今の状況だろうと思う。

(委員)

さっき気になっていたのは特に女子大であるということと、それから東京ではないということで、キャリアの選択の幅自体をどう広げるかという時にロールモデルが身近に非常に少ないし、幅があるということ自体どう気づかせるかというところが凄く難しいなというふうに思う。実際に、福岡市内の女子大生たちとそういう話をしていると本当に狭い狭い中でしか視野が持ててない。だからこそリベラルアーツ教育の真髄が問われるのだと思うが、もう少し女性のキャリアの幅なりモデルが見えるような機会を意図的に大学として設定するという必要なのかなと思う。それがないと選ぶにも、選ぶそのものが見えてこないというところが気になる。

(委員)

ICUの学生が4年間終えて出て行く時の自信というか、それはたぶん1年生の段階の、その教育の徹底にかなりあるのではないかとかねてから思っていた。色んな科目をかなり自由に取って自分で統合してくというのはあるが、やはり1年生や2年生の時に徹底して、リベラルアーツのそういう教育をすることが出来るかどうかにかかっていると思う。

(委員)

成功するかしないかというのは、そこにかかっているような気がする。1年間徹底して今までと違う見方をしると、価値観をひっくり返せという、だからそこがコアになっているのではないかと、そこが担っているからこそ、皆共通して認識しているところがあるからこそ、次へ進めるのではないかと、自信にもなっているのではないかと。実際問題として英語という意味では、そんなに皆パーフェクトではないが、一応その道具として使いこなして、間違いはあるかもしれないけれども、堂々と渡り合える、それで自信は結構付けていける。

(委員)

それと同じである必要もないけど、やはり4年間終わったところで、教養性の強い大学とかあるいは総合的な大学みたいなものは、学生に「私はこれはやっている」と、「これは自信がある」というものを持たせるといって、これが絶対必要。学生が最後のところで「私は何をやったのだろう」といふことの確信を持てるかどうかということ。

(委員)

経済とか法学とかとまたちょっと違って、理系の実験系というのは1年とか2年間、本当に手触りから出発して身につくもの。本を読んでも絶対身につかない部分が実験系だが、これにある程度の時間がかかるので、そのところは難しいところがある。

(委員)

いつも議論になるが、分野によってはある程度順番が違っても大丈夫というのもある。下から一つ一つ積み上げていかないといけないものもある。それをリベラルアーツの中でどうやって用意させていくのかというのが難しいところ。

(委員)

ICU の話を聞いていると、一つは英語で渡り合える力を付けるということがある種の自信に繋がるということなので、福岡女子大学の場合でも可能性があると思う。それと、女子学生が女性のリーダーとして育てていくために必要な自信というのはもう少し違うものがあるのではないかと。それを基本的にコアとなる教育の中で誰もが身につけるものとして、一般教育、基礎教育、共通教育とは違った別の項目を立てて入れるべきではないかと思う。

(委員)

リベラルアーツの中でやはり4年間を終えて、これだけは身につけたという、そう

いう自信があるようなものをやっぱりカリキュラムとして用意しなければいけない。ICU や色んなところで試みられていることを参考にできる分野もあるのではないか。

(委員)

言語の能力というのは必要で、それと背中合わせだが国際交流の経験みたいなものをもっともっと付けさせて、それが自信になるという、それがまた言語教育を刺激するということもある。あまり堅く考えずに、国際交流のような経験をどうして積ませるかというフィールドのところをもう少し押し出した方がいいかなと思う。

(委員長)

先に進みたい。第4が「魅力ある留学制度の構築」ということで、何か意見があればお願いします。

(委員)

単に留学したあるいは留学生を迎え入れたということだけではダメで、それを通して何を学んでいくか、何を学んできてもらいたいのか、何を留学生から得るのかというそのあたりの目的を焦点化しないと、単にやったというだけになってしまう。

(委員)

体験学習をする分野として、既に福岡女子大が持っている知的な財産として、例えば理系の環境とか生活とか生命系とかというもののフィールドでの体験学習ができるような留学というのを積極的に開発していくと、福岡女子大ならではの体験型の留学というので特色が出せるのではないか。

(委員)

今 JICA の青年海外協力隊には、通常の2年間行くものだけではなく、もっと短期の経験ができる、まだ在学中の学生でもできるというようなシステムがあるようだ。このようなプログラムがいつまで続くかは JICA がどう変わるかによるが、そのようなものも視野に入れておけば、より活動に広がりを持つてのではないか。

(委員)

福岡県が提携している国や都市と繋がるような形で、学生が交流するという、県立であるがゆえにできるような仕組みが考えられないか。県立大学であるがゆえにできる繋がりとか要素を、もう少し使った方が良く思う。そのような拠点のところと女子大の学生が、往来できるような仕組みを考えていくことで双方にメリットがあると思う。

(委員)

国立博物館も色々提携しているし、それから福岡市も釜山市とか、北九州市は大連市や仁川市などと提携している。考えられるルートは沢山あるのかも知れない。

(委員)

提言の中にもそのような意見があった。そういう地域の大学と海外留学の提携をできるだけ結んで、学生を受け入れる。そして単に大学に受け入れるだけではなくて、福岡の地元の企業などで、積極的に体験学習やインターンシップをしてもらう。そういう結びつきを深めてもらう、そういったことをやってくることが必要だと、まさしくそのとおりだと思う。

(委員長)

よければ次の第5の「学生寮を教育の場として活用する」についての意見をいただきたい。

(委員)

国際教養コースの学生にとりわけ強く義務付けているように読める。特にそのコースに限る必要はないと思うし、むしろ、色んな専門の学生と一緒に住むことのメリットの方が大きいのではないかと思う。もし1年生にということであれば、できれば全員という風にしたい方がいいと思うし、もし寮のキャパシティの上で難しいのであれば半期ずつでもいいと思うが、あるコースの人だけが寮にというのは、本来の寮についての委員会の考え方の流れからすると少し違うのではないか。

(委員)

国際系の学生には、留学生と一緒に生活することによってさらにスキルアップするという動機付けとなる。「教育の場」というからにはそういう動機付けなり、そういうプログラムが組みやすいのかなと思う。環境・食のところまで、例えば動機付けとして、人間関係力を養うとかで、強制的に全寮と言ったときに、その反応が少し心配。それと当然キャパが非常に広がる。1学年全員をとということになっても、やはり2年生から4年生の間にも寮の必要な学生もいるわけだし、それから留学生の支援という形で寮を考えた場合、「1年経ったら出て行け」というわけにはいかず、留学生はできるだけ長く寮にいられるような体制も考えなくてはいけない。そういうことを諸々考えると相当巨大な寮になる。

(委員)

福岡女子大学だけでなく、他の大学の留学生にも一緒に入ってもらおうという意見があったが。

(委員)

まず学部ができた時に、1年生入ってもらわなければならない。その時には留学生がほとんどいない。そうすると、同じ部屋で共同生活して、色々語学に役立つ学習をしてもらおうということが、なかなか難しい。そうすると、前回議論があったように、他大学の優秀な学生に募集をかけて来てもらう、特に九大あたりの学生に来てもらって、希望する1年生については、4人部屋であれば1人留学生の方に入ってもらって一緒に生活をする、こういうことをやる必要があるんだろうと思う。

(委員)

そのような形で寮を開放した場合に、九州大学で優秀な留学生が「それだったらこっちで」というようなことが有り得るのか。

(委員)

有り得ると思う。寮費の関係もあると思うが。1年目は留学生寮に入っている限りは、部屋代、光熱費等など非常に安い値段で過ごせる。ただ、九大の場合は1年目が終わると追い出されてしまうので、国費の奨学金等もっている学生はまだいいが、私費で来ている学生はかなり2年目から経済的に負担がかかるので、もし近隣に、経済的にそんなに負担がかからないで設備の良い寮があるということになれば、希望する留学生はおそらく相当数出たろうという風には思う。ただ、九大は移転する予定なので、全学部が伊都へ移ってしまった後に、福岡女子大の近辺から伊都キャンパスまで通うかということになるとちょっと難しいかなという気もする。

(委員)

九大の寮は個室か、それとも相部屋か。

(委員)

国際交流会館の大多数は個室。ただ、夫婦室と家族室というのも若干用意されていて、空いている限りは夫婦室、家族室も開放して、ルームシェアリングの形で留学生が入る。通常は夫婦で留学して来て夫婦室を希望する学生、あるいは家族で来た学生に割り当てる部屋だが、そうした希望がなく、夫婦室や家族室が余った場合は、ドミトリのような感覚で単身で来ている学生を複数名ずつ入室させている。単身室も含めて、部屋はちょっとしたビジネスホテルのようなイメージ。部屋自体は大変狭いが、

ベッドも机もタンスも冷蔵庫もクーラーも付いていて、しかもバス、トイレ付きの完全な個室。台所は共同で使える台所というのがところどころに設けられている。最近の留学生は部屋のレベルを上げないとなかなか入ってくれない、来てくれないという傾向があって、結果的にそのようなレベルアップした形での個室を提供するというふうになっている。

(委員)

A P Uも個室か。

(委員)

個室。新しく造ったのは、2室を仕切ってオープンにもできるし、個室にもできるという仕組みを考えたが。

(委員長)

次に進みたい。第6の「入学選抜の多様化」ということで、これからは多様な入学選抜が必要なのではないかということで意見があった。それから9月入試も検討してはどうかと。それから入試が非常に大切になってくるから、やはり入試業務全体を統括するような組織が必要になるのではないかという意見。

第7の「社会貢献機能の充実」ということで、先ほどちょっと出たが、社会人女性のキャリアアップとか、女性の再就職支援のための教育プログラムとか、それから大学と地域が相互交流するようなそういった環境づくりとか、そのような機能を持つ拠点としても必要ではないかといった意見が出たが、その他に何かないか。

(委員)

社会人入試というのを考えてはどうか、特に女性の社会人入試で入ってきた方々は非常にモチベーションも高いし、ある程度子育てが終わったりとかいう方もいて、色々な会社とか色々な社会での経験を積んだ上で入学してくるので、もうすでに多角的な視点とかを備えた方々も多い。社会的な貢献という意味でも、それから女性という意味でも、社会人入試というのはひとつ検討の余地があるのでは。多様性という意味でも、ただ18歳の人たちだけじゃなくて、色々な年代の人たちがいると良い。リーダーシップを発揮してくれたりとか、クラスの中に活気が出たりするとか、いい意味で貢献してくれる。

(委員)

それは大切な点だと思う。県立大学の場合は特に大切。項目を一つ立てた方が良い。

(委員)

女性の再就職の支援ということで、枠として別途取ってもいいのかも知れない。そうするとますますキャリアアップとかキャリアパスに通じるような実践的な教育ないし教育科目の提供というところで何か具体的なものを見せていかないと、社会人枠というものを設けても絵に描いた餅になってしまう。

(委員)

全ての人がそのような形のことを求めるかどうかは分からないが。

(委員)

むしろ純粋な学問的興味で入ってくる人の方が多い。

(委員)

通信教育というほどではないが、働きながら学ぶ人に対するサポートをするのはどうか。と言うのは、例えば看護学校を卒業した後で、更に上に進むために学士などが必要な場合に、他の大学に入学し直して学士を取るとかというような形で自分のキャリアを積み上げている方もいる。そういう方々が他の分野でも、例えば栄養とかそういうところでもいるのだったら、それも含めて、在職のままキャリアアップしたい人のための教育の場ということも考えられるのではないかと思う。

(委員)

学部に入りたいという方は、一般の学生と同じ。入試のところでは考えなければならぬが。キャリアアップということであれば、地域貢献のところでは例えば、受けた授業に対して履修証明を出すとか、そういったキャリアアップに結びつくような、1ヶ月とか2ヶ月とか半年とか、そういった短期のプログラムを用意して支援していくということになるのではないか。夜間であったり通信教育ということまでは、今の段階ではそこまでの議論は難しいのかなという感じを持っている。むしろ地域貢献での女性支援プログラムというところで短期、あるいは半年程度のプログラムをいろいろ用意して履修証明を出していくという考え方のほうが現実的かなという感じがする。

(委員)

改革の理念に沿った入試方式というのがやはりあるべきだと思う。それはAO入試の方が沿った形でできるのではないかとということと、一般入試とAO入試でメリット、デメリットがある中で、学力を取るのか意欲を取るのかどっちかになってきた場合には、意欲の方に、しかも一人に対して時間をある程度かける。そしてその人たちを育てて次の世代に繋げていくことで、入試そのものが多分大学のメッセージになる

と思う。そういったところを一つ売りにしてはどうか。また、実際にその入試方式別に入って来た生徒がどのような形で卒業していくかといったところの説明の責任も、高校や地域から求められてくる可能性が強い。そのとも含めて考えていかなければいけない。

(委員)

限られたプログラムの中で大学生活を送り、あるいは学習することになるので、ある程度の基礎学力は必要。それはどこで見るのかというと、やはりセンター試験とかで見ていく必要がある。その上で意欲の問題というのは非常に大事なのでAOを組み合わせる、そのようなイメージかなと思うが、これはまだ、少し先の段階で議論する話。

(委員長)

これは詰めていくべき問題だが、まだ時間的に余裕があると思う。社会人枠を設けるということはやはり大事な点だということで確認しておきたいと思う。

それでは第8の「教職員の確保」、結局は改革が成功するかしないかは人材によるということで、優秀な教員それから優秀なスタッフが必要ということだが。

(委員)

ICUのELPでは、どのような専門を持った教員が教えているのか。

(委員)

いわゆるTESLとかTESOLとか言われる英語を第二言語として教えるという分野がある。それで修士かあるいは博士号を持っている教員。グローバル化した世界なので何もネイティブスピーカーの人だけとは限らないが、そういった方々とロールモデルの話もあるので、日本人として英語を使いこなす方々も見せる必要があるなのでその両方。7対3ぐらいの割合でノンジャパニーズの方が方々の方が多い。それと、やはり専任の方々でほとんどまかなうということ。こういったコアの部分で非常勤というのはなかなか難しい。

(委員)

そうすると、教員1人あたりの学生数はどのぐらいの割合になるのか。

(委員)

1クラス大体20名前後。先生の側からすると、インストラクターの方々に12コマ持って、さらに、教えるだけではなくてコーディネートする仕事だとか、教材を開

発したりだとか、あと、多種多様な委員会に属してその運営に携わっている。ただ単に授業をそのコマだけ行ってやればいいということでは、とてもこういったカリキュラムはできないので、やはり優秀な専門知識を持った先生方の確保というのは本当に大切なことだと思う。現在、33名の専任でまかなっている。

(委員)

どこまでやれるか分からないが、教員も多様な雇用の仕方は検討の視野に入れておく必要がある。ワンパターンで、専任でテニユア全部というわけにはいかない。色々な可能性があるから、どのような形にするかはこれから考えたらいと思うが、多様化を図るためには、任期制をやっぱり使わないと。良い先生をたくさん取ろうと思ったら絶対必要。

(委員)

ただその場合に、何か持続性を持てるようなコアの人がいて、その人がコーディネートをして、きっちりとやるということが重要。

(委員)

その33名の方々は、研究には全員が関わっているのか。

(委員)

本来は研究と教育とをやるということだが、教授会のメンバーではなくて英語教育プログラムに関わっている方は、昇任などでは主に教育、ティーチングの方を重視する。もちろん業績も見るが、なかなか両方は難しいだろうということで、どちらかと言えば教育を重んじる。ただもちろん研究もしてもらう。

(委員)

確保は相当大変。

(委員長)

次に、第9の「改革の実施時期」と第10の「新たな施設の整備」というところで、ご意見があればお願いします。

(委員)

学生寮が一番のポイント。留学生との問題とか、そこから来るような性格がある。ただ単に箱物じゃない。

(委員)

実験系の研究室というような部屋の設備はどのようになるのか。

(委員)

教育の中身が決まれば、それからあとは具体的にそのカリキュラムの編成をするための部会で色々やっていくことになるが、併せてどのような建物が必要なのかということをやっていかななくてはならない。ある程度基本計画なりその全体が見えた段階で建物の基本構想というものを作ることになる。そこでどこに実験室を置いてどこに図書館を置いてとかそういう話になってくる。やはり、学生の規模も決まらないといけないし、どういう教育内容にするのかということも必要。そのためにはどのようなスペースが必要なのかということも出てくるので、そこら辺がある程度見えた段階で施設整備の構想を作っていく。

(委員長)

他に、全体を通して何かご意見があればお願いします。

(委員)

前回の会議で、クォーター制とセメスター制の話があったが、クォーター制の方が楽かも。要するに同じ先生で同じ種類の講義が、週に2回ある。そちらの方が現実的だと思う。半学期学んだものを一夜漬けで勉強しろ、試験を受けろなんて、これは難しい。クォーター制のほうが教育効果が大きいと考える。

(委員)

クォーター制でやってるところは、そんなたくさんはない。APU はそれでやっている。

(委員)

アメリカ型のクォーターは、10週が約1学期で、夏もあるので年4回。IGU は、夏は無いが、やはり10週で3回。

(委員)

これは形式的には楽に見えるが、やるとすると相当大変。教員の世界では。準備のこととか全然変わってくるから。

(委員)

3回、成績をきっちりと出さなければいけないし、11月の場合には1週間のうち

にもう全部成績を出さなければならない。

(委員)

本当のクォーターの場合は、4月、5月。1週間休んで6月、7月。で8月は休んで、9月、10月。11月、12月。1週間のインターミッションを入れてやるが、学生は慣れるまで大変。教員にとっては、例えば1クォーターと2クォーターやったら後は全部空くとか、まあそういうメリットはある。学生は、集中してやれるからというのと、ものすごく忙しいのと両面がある。クォーター制は、学生は相当追いまかれると思う。デメリットとすれば、頭に入る前に終わってしまうと言う人もいる。だけど慣れてくれば集中してやるからいい。外国の生徒は概して集中型でやっている。

(委員)

留学の時期との関係でこの話が出てきたと思うが。

(委員)

そのような話だった。クォーターはかなり革命的。日本で純粹の本当のクォーターをやっているところは、あまりたくさんないのではないか。Semesterでもなかなか大変。先生にしたら。本当のSemesterをやろうと思うと、年2回、サイクルをやらなければならない。

(委員長)

時間となったので本日はこれで終了させていただく。

次回は9月16日の13時30分からの開催とする。事務局の方から何か。

(事務局)

追加のご意見があれば、随時いただきたい。今回欠席の委員の方々からも、本日の検討課題についてのご意見をいただき、次回の委員会の際に紹介したい。

(委員長)

本日の委員会はこれで終了させていただく。